

# 岩手のパワースポット

## 岩手山

岩手山（いわてさん）は、東北、[奥羽山脈](#)北部の山で標高2,038mの県内最高峰の日本百名山のひとつです。

すそ野を走る東北自動車道からは、次々に姿を変える雄大な山をまじかに見る事が出来ます。

東の盛岡側から見る姿は富士山のように長い裾野を引く整った形で、「表岩手」と呼ばれ、南の雫石町や北の八幡平市松尾方面から見ると、外輪山の連なりが凹凸をなし、「裏岩手」と呼ばれています。

古来、信仰の山で、成人男子は精進潔斎して登山し、女子禁山だったそうです。

毎年7月1日が山開きで、秋田側と岩手側から登山し頂上で安全祈願がされています。

高橋克彦氏の小説にもUFOなどが出る山として紹介されたりしていますが、

とてもおおらかな懐の深さ真気を感じさせる山のひとつです。

別名に巖鷲山（がんじゅさん）があるが、本来「いわわしやま」と呼ばれていたものが「岩手」の音読み「がんしゅ」と似ていることから、転訛したものだとも言われる。春、表岩手山には雪解けの形が飛来する鷲の形に見えるため、これが山名の由来になったとも伝えられる。静岡県側から見た富士山に似ており、その片側が削げているように見えることから「南部片富士」とも呼ばれる。古名に「霧山岳」「大勝寺山」。俗称に「お山」。「子富士」とペアで「親富士」と表現することもある（原敬句碑より）。

古来から信仰の山で、山頂外輪を取り囲むように石仏、山麓の滝沢村・盛岡市に岩手山神社が祭られる。前九年の役以後、巖鷲山大権現大宮司として伊豆国出身の「栗谷川（厨川、工藤）家」が代々祭事を務めることとされていたが、後に祭祀権をめぐり攻防があった。



## 丹内山神社

祭神は、約1200年前にこの地方を開拓したと伝えられる多邇知比古神（たにちひこのかみ）。

平安時代に空海の弟子日弘が不動尊像を安置し「大聖寺不動丹内大権現」と称しています。

平安後期は平泉の藤原氏、中世は安俣小原氏、近世は盛岡南部氏の郷社として厚く加護されてきたといえます。

この丹内山神社は、高橋克彦の『火怨—北の耀星アテルイ』で、蝦夷（えみし）の首領・阿弭流為が、アラハバキ（荒覇吐、荒吐、荒脛巾）神の御神体の前で、巫女により祝詞をうけ、21年後の坂上田村麻呂との決戦を予見するシーンの舞台となっています。

小説では、東和の里が物部氏の本拠地となっている。蘇我氏との戦いに敗れ都を追われた物部は、物部の聖地であるこの地に潜み、金を採掘し、蝦夷を経済面でサポートし、アラハバキとは物部を繁栄に導く、鉄の山を支配する神だとされ

ています。

◎◎◎

アラハバキという耳慣れない神の名を一躍有名にしたのが『東日流外三郡誌（つがるそとさんぐんし）』という古代文書です。昭和 22 年、青森県の和田喜八郎氏の自宅改装中に天井裏から発見されるや、本物説偽作説が入り乱れ大論争となって、現在、判定は偽作説にほぼ固まっているようですが、そこに描かれた古代津軽の荒吐（あらははぎ）族と大和朝廷の抗争の歴史を垣間見る思いです。

丹内山神社に見られる磐座（いわくら）信仰は、神籬（ひもろぎ）信仰とともに神社の原始形態と言われているそうです。

アミニズムでは、石にはいろいろな神や霊が宿ると考えられていたようです。

この神社の**創建**年代は、約 1200 年前、**上古**地方開拓の祖神、多邇知比古神を**祭神**として祀っており、**承和**年間(834~847)に空海の弟子(日弘)が**不動尊**像を安置し、「**大聖寺**不動丹内**大権現**」と称し、以来、**神仏混淆**による尊崇をうけ、平安後期は**平泉**の**藤原氏**、中世は安俵小原氏、**近世**は盛岡南部氏の**郷社**として厚く加護されてきたと伝えられる。さらに、明治初めの**廃仏毀釈**により丹内山神社と称し現在に至っている。

この**本殿**は、現存の**棟札**によると、文化七年(1810)に再建されたもので、盛岡南部利敬公の代、当時の**別当**は小原和泉實吉であり、棟梁には中内村の吉重郎、脇棟梁には八重郎・宇吉が造建にあたったことが知られる。

この建造物の特徴として、本殿の**内陣**には、**権現**づくりの**厨子**が据えられており、正・側面の外壁一面に中国の古事や**古事記**・**万葉**風の彫刻、脇障子は唐獅子と**牡丹**が彫刻されている。県内の**社寺**建造物の内では彫刻装飾優位の建物で、当時の地方大工の力量を知ることのできる貴重なものであり、平成二年五月に県指定**有形文化財**(建造物)となっている。

又、本殿の左側山頂付近の**経塚**(県指定史跡)から全国でも数個しかないと云われる影青四耳壺(白磁無紋の壺、**北宋**の花瓶)、**湖州**鏡、中国**古銭**、**経筒**など(県**指定文化財**)が出土しており、**平安時代**末期頃からの地域の優れた文化の跡が偲ばれる。

(Wikipedia より)

## 赤石神社 (あかいしじんじゃ)

所在地

〒028-3307

岩手県紫波郡紫波町桜町字本町川原 1 [MAP](#)

TEL:019-672-2767

赤石神社 (あかいしじんじゃ) 別名・志賀理和気神社 (しがりわけじんじゃ) は、

坂上田村麿が東夷征討拠点として志波城築城のおり、守護神として香取・鹿島の2柱を  
勧請したのが創祀と言われます。

日本最北の式内社で天正年間には南部一の宮として栄えています。

祭神は、当地域の鎮守神である志賀理和氣神。

北上川の川底に赤い大石があり、川波がたつと美しい紫色に染まったことから「紫波」と呼ばれる  
ようになり、赤い石を神社境内に祀ってからは「赤石神社」とも呼ばれたといひます。

鳥居のそばを飾る南面の桜は和歌にも歌われているそうですので、桜の季節にも  
訪れたい神社です。

延暦二三年（804）に坂上田村麻呂が、東北開拓の守護神として香取、鹿島の二神をまつ  
つたとされるのが、日本最北の延喜式内社・志賀理和氣神社であり、紫波郡紫波町桜町に  
鎮座する。境内には三尺余の赤石があることから、通称「赤石神社」ともいふ。

○今日よりは紫波と名づけん。この川の石に打つ波、紫に似て 斯波孫三郎詮直

江戸時代の南部三三代藩主の歌。

○御社はとまれかくまれ、志賀理和氣、我が十郡の国のみをさき 南部利視

東北地方には、田村麻呂が創建したといふ神社仏閣は多い。『御伽草子』の話では、田  
村麻呂の母は、陸奥国はつせ郡田村郷（福島県田村郡）の賤女（下級巫女）だといふ。田  
村麻呂伝説の流布には、日本の多くの伝説がさうであるやうに、さうした職業の人々の介  
在が想像される。

（Wikipedia より）